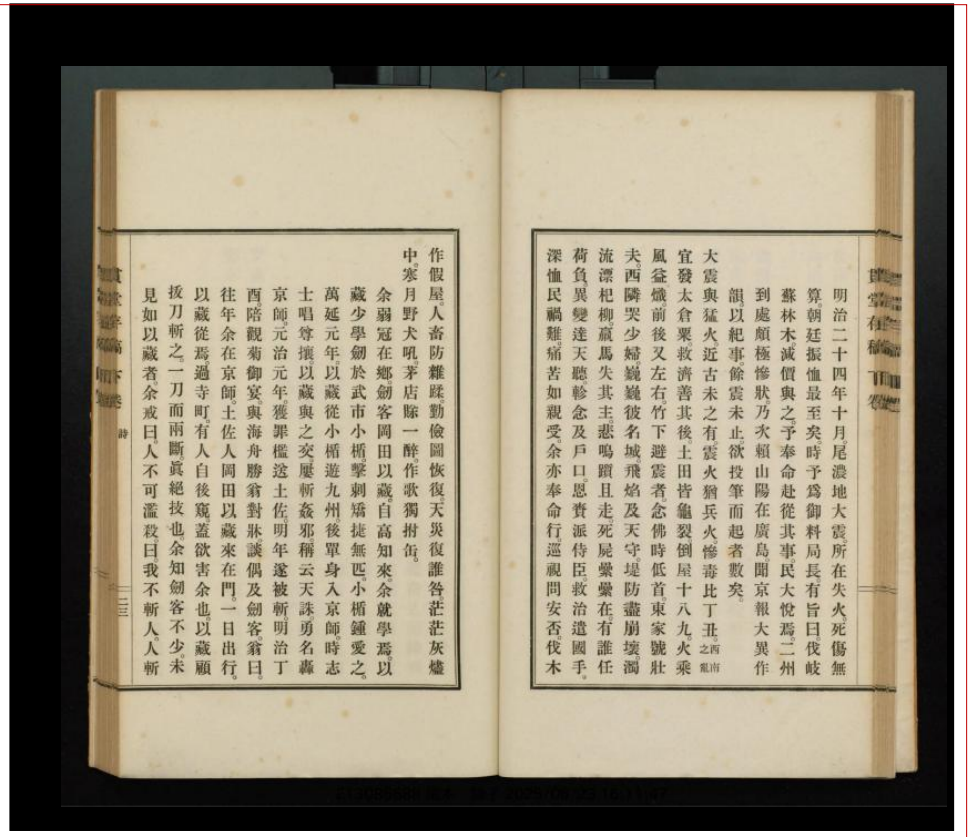
以蔵、半平太の足跡を伝える「貫堂存稿」

宿毛歴史館の受付では、歴史散歩マップがもらえます（インターネットでも公開されています）。
歴史館を起点に、所要時間50分、およそ2kmのコース。マップに従って歩いて行くと、展示室で見たばかりの偉人たちゆかりの史跡が次から次へと目の前に現れ、本当にこの場所にこの人たちが生きていたんだという実感を味わうことができます。

❶**岩村礫水翁旧居之碑：**半平太・以蔵の門人となった岩村通俊の生家跡。❷**宿毛一里塚跡：**九州遊歴の際、半平太・以蔵もここを通ったかもしれない。　❸**竹内綱・明太郎吉田茂邸跡碑：**歴史館の隣りは竹内綱の生家。❹政治家林有造邸は公開されておりカフェ・ショップも併設。❺宿毛銘菓きんぼ



明治二十四年十月尾濃地大震所在失火死傷無算朝廷振恤最至矣時予爲御料局長有旨曰伐岐蘇林木減價與之予奉命赴從其事民大悅焉二州到處頗極慘狀乃次頼山陽在廣島聞京報大異作韻以紀事餘震未止欲投筆而起者數矣。
大震與猛火近古未之有震火猶兵火慘毒比丁丑之亂市宜發太倉粟救濟善其後土田皆龜裂倒屋十八九火乘風益熾前後又左右竹下避震者念佛時低首東家號壯夫西隣哭少婦巍巍彼名城飛焰及天守堤防盡崩壞濁流漂杞柳羸馬失其主悲鳴躑且走死屍纍纍在有誰任荷負異變達天聽軫念及戸口恩賚派侍臣救治遣國手深恤民禍難痛苦如親受余亦奉命行巡視問安否伐木作假屋人畜防難蹤勤檢圖恢復天災復誰咎茫茫灰燼中寒月野犬吼茅店賒一醉作歌獨拊缶。
余弱冠在鄉劍客岡田以蔵自高知來余就學焉以蔵少學劍於武市小楯擊刺矯捷無匹小楯鍾愛之萬延元年以蔵從小楯遊九州後單身入京師時志士唱尊攘以蔵與之交屢斬姦邪稱云天誅勇名轟京師元治元年獲罪檻送土佐明年遂被斬明治丁酉陪觀菊御宴與海舟勝翁對牀談偶及劍客翁曰往年余在京師土佐人岡田以蔵來在門一日出行以蔵從焉過寺町有人自後窺蓋欲害余也以蔵顧拔刀斬之一刀而兩斷眞絶技也余知劍客不少未見如以蔵者余戒曰人不可濫殺曰我不斬人人斬

宿毛市立 宿毛歴史館
吉田 茂

〒788-0001高知県宿毛市中央2-7-14
TEL:0880-63-5496

ただいま展示中

短刀 銘 肥前国忠吉

たんとう めい ひぜんのくにただよし

竹内綱の佩刀。綱は土佐藩宿毛領主の重臣で、維新後は後藤象二郎を助け、主に実業家として経営に手腕をふるい、その一方で板垣退助とともに自由党を組織し、重鎮として活動しました。吉田茂の実父としても知られています。
この刀は、小沸出来の浅い湾れ刃、杢目肌に大肌が混じり、初代忠吉初期作の特徴が見られます。

ただいま展示中

貫堂存稿

かんどうぞんこう

岩村通俊の遺稿などをまとめたもの。上巻には「此為武市先生遺墨。先生少時。学尽於徳弘薫齊。号瑞山又茗磵。万延元年。遊九州。帰途過宿毛。留数日。余一見辱知。臨別作此図。其下獄。余恐禍蔓延。取往復文書。尽火之。今伝家者。有此畫耳。七士伝稿成。縮写掲巻末。頓覚先生英姿。躍然於紙上矣。通俊識。」とあり、岩村通俊（当時20歳）がこの時に武市半平太に会い、以後文通したこと、武市半平太入獄後はその手紙を燃やした事がわかります（なお同書に掲載されている武市半平太の絵および、『宿毛市史』に記載の岡添家に伝わった富士山の絵は現在未確認）。
また下巻には「余（岩村通俊）弱冠在郷。剣客岡田以蔵。自高知来。余就学焉。以蔵少学剣於武市小楯（以下略）」とあり、やはり20歳の時に「剣客岡田以蔵」が訪れた際、剣術を学んだことが記されています。
岩村通俊は戊辰戦争時に京都で御親兵隊長を務めて以来官途につき、なかでも北海道開発に注力し、初代北海道長官として札幌、旭川の基礎を築きました。その父、岩村英俊は、下級士族から宿毛領主に抜擢され、教育、経済の分野で幕末維新期に多くの人材を輩出する宿毛の素地をつくりました。
武市半平太もその才に期待して宿毛を訪問、英俊と若き通俊に面会しています。

©令和土佐藩・宿毛市立宿毛歴史館　配布期間：2025.10.11. - 12.7.